

移動・交易・疫病

命と経済の人類全史

玉木俊明

国際線

99%減

ロックダウン | 外出制限

人の移動が激減した後で

アフターコロナの世界は どう変わるのか!?

経済の大転換点を、人類7万年の歴史から予見する!

移動・交易・疫病

命と経済の人類全史

玉木俊明

星海社

171



SEIKAISHA
SHINSHO

ヒトは、移動する存在である。

こう言うと、読者は、ごく当たり前のことを言っているにすぎないと思われるでしょう。これは「当たり前」のことではありますが、全生物のなかで人類という種にのみ当てはまる重要な特徴を表しているのです。

人類の一部は、今から7〜5万年前に、生まれ故郷であるアフリカを脱出する「出アフリカ」を成し遂げ、世界中に住むようになりました。どのような種でも、これほど広範囲にわたって移動したものはいなかったと思われれます。したがって「移動」という行為は、実は人類の特徴をもっとも的確に表しているのです。

本書は、「移動」という用語をキーワードとして、出アフリカから現代までを論じた書物です。人類は、移動によって何を成し遂げたのか、移動を中心にするなら、歴史はどのよう捉え直せるのかを論じています。

移動には、プラス面もあれば、マイナス面もあります。そのどちらも、本書では論じているつもりです。

ヒトが移動すると、モノや情報が移動します。モノが大量に入手できると、ヒトは豊かさを増します。さらなる豊かさを求め、移動を促進するために、国家は道路網を整備します。ヒトの移動の中心になる場所は情報拠点になるばかりか、文化の発信地にもなります。

出アフリカでは主として徒歩によって移動していた人類は、大航海時代には帆船はんせんにより、現代では飛行機によって移動するようになりました。以前なら、一生かかっても到底移動できないような長距離を、現代ではわずか1日で移動することができます。

世界は、大きく縮まったのです。

しかしそのため、世界はいつパンデミックが発生してもおかしくないほど「密」になりました。それが、移動が引き起こす最大の問題点といえます。そのようなパンデミックとなり合わせの社会から、われわれはどのようにして離脱すべきなのでしょう。そういう点についても、私なりの考えを述べたつもりです。

以上が、本書のあらましです。本書のもとになった素材は、ネットジャーナルである

JBpress に連載している「ビジネスに効く！ 世界史最前線」の記事をもとにしており、さらに書き下ろしの文章をいくつか加えました。

JBpress の編集者である阿部崇氏と、本書を担当していただいた星海社の片倉直弥氏にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

2020年10月 大阪にて 玉木俊明

目次

はじめに 3

序章 人類史とは移動の歴史である 17

移動の人類史 18

人々が欲したモノと情報 20

定住と疫病 22

新世界と旧世界 24

われわれの選択は正しかったのか 26

第1章

古代

世界経済はヒトの移動の産物だった 29

われわれは「移動」を選んだ人類の子孫である 32

一時は「1万数千人」まで減少した現生人類 32

出アフリカを可能にした毛皮と言語 34

文明よりも移動を選んだ人々 37

現代社会は「出アフリカ」に規定されている 39

地中海を股にかけて巨大交易圏を作り上げたヨーロッパ商業の父・フェニキア人 41

フェニキア人とはどういう民族だったのか 42

ティルスの役割 46

カルタゴの隆盛 47

フェニキア人の遺産 52

中国の経済成長は、独裁者・始皇帝、専制者・武帝、暴君・煬帝のインフラ整備の賜物？ 54

黄河文明と長江文明 54

メソポタミアに後れを取った青銅器文明の誕生 55

鉄器の普及もメソポタミアに遅れる 57

始皇帝による単一市場形成で一気に経済成長 60

武帝の治世 62

三国時代 63

五大河川をつなぐ巨大インフラ事業「京杭大運河」 64

隋の制度を受け継いで成長した唐 66

開元の治と玄宗、そして唐の滅亡 68

目覚ましい成長を遂げた宋代の経済 68

第2章

中世

商業の活性化と全欧パンデミック

73

古今東西、遊牧民は文明を築く巨大な原動力だった 76

遊牧民の起源 76

「最初の遊牧民」スキタイ人 79

漢を「属国」にした匈奴 80

ゲルマン人を「大移動」に駆り立てた遊牧民 82

「遊牧国家」モンゴル帝国は経済重視の国家だった 86

競争で経済成長を促進 86

駅伝制で実現した世界最速の情報伝達システム 86

実は海上貿易も重視 88

タタールの平和とユーラシアの商業発展 89

漢人の王朝の後継者だったモンゴル帝国 91

14世紀半ば、全欧が怯えた「黒死病」パンデミック 93

人口過多のヨーロッパ 94

ペスト菌の感染ルート 96

黒死病の広がり 98

黒死病の影響 100

遍歴商人から定住商人、そして国際貿易商人へ 102

商業の復活 102

商業情報発信の担い手 聖職者から商人へ 104

第3章

近世 人の移動が盛んになる一方、通信技術も発展した 109

サハラ砂漠の拡大が大航海時代を導いた 112

「塩の道」サハラ横断交易ルート 113

サハラ縦断交易ルートの誕生 116

大航海時代の開始 119

コロンブスの交換 ヒトとモノと病気の大西洋史 122

コロンブスの交換 122

新世界の「発見」 124

砂糖の貿易 126

セファルデイムの役割 129

ヨーロッパと東南アジアを結んだ、アルメニア商人の知られざる偉業 132

セファルデウムとの対比 132

アルメニアの歴史 133

ロシアとの貿易 137

インド、チベットと東南アジアとの関係 138

インドから東アジアへのネットワーク 141

インド洋貿易 141

東南アジアの商業 143

琉球王国の役割 146

海と陸のネットワーク 148

近世ヨーロッパでは商業の「共通マニュアル」が作られ、「商業新聞」が世界中の情報を伝えた 150

情報発信の担い手としての聖職者 150

書物は筆写して作られる貴重品 150

商人の情報発信を担った教会 152

グーテンベルク革命が変えた世界 153

グーテンベルク革命と「商売の手引き」 155

商業活動に参加しやすい社会に 156

情報の非対称性が小さい世界の誕生 157

プロテスタントとカトリックによる経済成長 158

オランダが発展できたのは、どんな人も拒まずに受け入れたから!? 160

寛容性のないヨーロッパ社会 160

宗教的寛容と情報 161

人口の流動性が高いアムステルダム 164

商業情報のハブとしてのアムステルダム 164

オランダが促進したヨーロッパの経済発展 166

流浪のユダヤ人を活用したオスマン帝国 169

ユダヤ人のスペインからの追放 169

セファルデイムの移住 170

オスマン帝国内に移住したユダヤ人 172

オスマン帝国でのユダヤ人の活躍 176

セファルデイムの役割 178

近代

遠隔通信技術が発明された後、それでも人類の移動は増え続けた

世界最高の海運力を失って衰退した明代中国の悲劇 180

ユーラシア大陸に跨る巨大帝国と海上交通網の発達 180

将兵2万7800人を引き連れた鄭和の大艦隊 183

海禁政策が招いた中国の悲劇 184

イギリス商人の活動が近代の「保険」を生んだ 187

リスクはヘッジしなければならぬ 187

保険の起源 188

「事業の永続性」と「大数の法則」 189

「政治算術」 191

海上保険の発展とイギリス 193

「蒸気船」出現で増す貿易量 194

蒸気船の登場が可能にした『母をたずねて三千里』 200

大型化の宿命を負った蒸気船 201

蒸気船でグローバリゼーション 202

縮まる世界 204

ラテンアメリカと結ばれたイギリス 206

イギリス船はオーストラリアやアジアへも 207

アジアで海運業を発展させたのは日本だけ 209

「風土病」だったコレラがパンデミックを起こすまで 211

グローバリゼーションと風土病 211

コレラの特徴 212

パンデミック以前のコレラ 212

19世紀に突如として始まるパンデミック 213

コッホとパチーニ 215

コレラのパンデミックはもうないのか 217

史上最悪のパンデミックだったスペイン風邪の大流行 219

2009年流行のインフルエンザと同型だったスペイン風邪 220

判明していないスペイン風邪の発生源 221

アメリカを飲み込んだ大流行 222

第1波・第2波・第3波 223

若者に多かった犠牲者 225

終章 **パンデミックと人とモノと情報の移動** 新型コロナウイルスは人の移動をどう変えるのか 227

新型コロナウイルスの伝染スピードの速さ 228

出アフリカを選択した人類 229

移動スピードの上昇 230

情報伝達のスピード 234

アフターコロナの社会が意味するもの 236

序章

人類史とは移動の歴史である



移動の人類史

現生人類は、ホモ・サピエンスと呼ばれます。この種は、現在では世界中を住処すみかにし、76億人というとても人口をもつまでに至りました。

ホモ・サピエンスがアフリカを出て世界各地に散らばり始めたのは、今から7〜5万年前のことでした。現在の研究では、もともとアフリカを居住地としていた人類のうち、約5000人がこの「出アフリカ」に加わったとされます。

ここからわかるように、人類は、数万年の歳月をかけて世界中に居住しました。それはまた、ホモ・サピエンスの歴史とは、移動の歴史であったことを意味します。人類の歴史とは、移動の歴史であると言えるでしょう。

では、なぜ出アフリカをおこなったのでしょうか。

私は、人類という種が生き延びるために、アフリカ以外のさまざまな場所にも居住するという選択をしたのではないかと考えています。

もし、いくつもの地域に人類が分かれて居住していたなら、ある地域の人類が滅亡しても、別の地域の人類は生き延びることができるはずで、人類が居住する気候区ごとに自然環境や風土病は異なります。ある気候区で疫病えきびょうが発生したとしても、その地域で定住し

た人々と他の地域に住む人類が没交渉であれば、他地域の人類に被害は及びません。種の最大の目的が種の保存であるということを考慮に入れば、この選択・リスクヘッジはきわめて理にかなってはいはずです。

ホモ・サピエンスは主として徒歩で、いろいろな地域への移動を成し遂げました。すると当然、定住する人々とは別に、ある地域から別の地域へと移動する人々も存在します。そうしないと、人類はいくつもの地域に居住することはできません。したがって、「移動する」という行為と「定住する」という行為は不即不離の関係にあり、それゆえ人類が当初想定していたさまざまな地域に分散して定住するという種の保存のための選択は、そもそも最初から失敗する運命にあったと言えるのです。一地域で発生する疫病が、他地域に広がるのは、人類が移動を続ける限りむしろ当然です。種の保存だけを考えるなら、人類はある時点で、移動そのものをやめるべきだったと言えるのではないのでしょうか。

徒歩による移動が主流であった時代が長く続きましたが、15世紀に始まった大航海時代から、船による長距離の移動という選択肢が加わりました。すると、世界中に疫病が蔓延まんえんすることも増えました。

その後、20世紀後半から航空機時代になると、すべての人々が、「移動」することが当た

り前の時代となります。徒歩なら到底できなかつた距離の移動が、現在では1日で可能になりました。ところが、世界が一体化すればするほど、疫病が蔓延する可能性も高まるのです。それによって、人類が滅亡する可能性があることも、われわれは気づくようになりました。

人類は、種の保存を何よりも優先するという出アフリカの時の選択に反したことにより、疫病が蔓延しやすくなり、それにより人類は常に疫病の危機にさらされることになったのです。新型コロナウイルスが世界中に蔓延したのは、その帰結だったと考えられます。

人々が欲したモノと情報

人類は、生き延びるために「移動」という手段を選択しました。しかしそれは、人類のいわば本能的な行為であり、無意識のうちにおこなわれています。人々の意識は、それとはやや異なっていたものと思われれます。

人類の意識には、より楽しく生きたいとか、より豊かな暮らしをしたいという遺伝子が組み込まれているのではないのでしょうか。超長期的に見れば、人類の生活水準は、最初は本当に少しずつ、そして19世紀からは急激に上昇しました。われわれは、経済成長を当た

り前のことだと考えていますが、人類の歴史から見れば、経済は成長しないのが当たり前でした。明日は今日より豊かだとはいえない時代が非常に長く続いたのです。それが変わったのは、人類の移動が盛んになった15〜16世紀からでした。

一例を挙げるなら、おそらく11〜12世紀には、ヨーロッパはアジアから香辛料を輸入しています。より正確に言えば、東南アジアのモルッカ諸島からアジア人の商人の手によって紅海を経て香辛料がエジプトのアレクサンドリアまで運ばれ、そこからイタリア商人がイタリアまで輸入し、さらにヨーロッパ各地へと輸送していました。

ところが、1498年にポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰きぼうほうを通るルートによりインドまで航海して以降、ヨーロッパ人は積極的にアジアに出かけ、香辛料をヨーロッパの船で輸入するようになります。そして18世紀からは、茶を中心に輸入します。

さらに1492年にコロンブスが新世界を「発見」してから、ヨーロッパ人は新世界に出かけ、次々に植民地化していきました。16世紀には巨大な銀山が発見されたため、ヨーロッパ人は銀を輸入します。

さらに新世界が原産地であるじゃがいもやトマト、そしてアジアが原産地であった砂糖やアフリカ原産のコーヒーを新世界で大量に生産することに成功し、ヨーロッパに輸入し

ました。そのため、ヨーロッパ人の生活水準は大きく上昇したのです。

15～17世紀の「大航海時代」とは、ヨーロッパ人がヨーロッパ外世界へと出かけただけではなく、ヨーロッパに世界中の商品を輸入し、自分たち自身の生活水準を向上させた時代でもあったのです。

その後18世紀に発生した産業革命によって、経済成長率は上昇します。ただしその成長率は、ほんのわずかででした。ですが、産業革命のおかげで、人々はそれまであまり入手できなかった綿織物を安価に入手することができますようになります。カリブ海地方で栽培された綿花をイギリス本国に持ち帰り、綿織物とし、それを世界中に販売するために、イギリス人は出かけていったのです。いわば移動により、イギリス人は巨額の富を得たのです。

定住と疫病

かつて、世界にはメソポタミア、エジプト、インダス、黄河こうがの四大文明があったとされてきましたが、現在ではそれ以外に、長江ちやうこう（揚子江ようすこう）と古代アメリカの二つの文明を加えて、「六大文明」というのが普通です。

以前は、文明は必ず大河のそばに発生するとされてきましたが、現在では、大河が不可

欠のものではないということが、中央アメリカの高地に位置する古代アメリカ文明の存在から立証されています。

人類は、これらの地域に定住することにより文明を発展させました。定住して農業に従事するようになると、家畜を飼い、そのために伝染病が流行することになりました。動物由来の感染症としては、狂犬病、回虫症かいちゅうじゅう、サルモネラ症、 Dengue 熱、日本脳炎たんにせ、炭疽たんそ、破傷風しょうふう、ヤコブ病などがあります。

さらに、鳥インフルエンザや豚インフルエンザは、それぞれ鳥と豚からヒトへの感染症へと変化したインフルエンザです。

こういった病気は、狩猟採集時代にはないものでした。そもそも、人口密度が少なく、現在でいう「三密」（密閉・密集・密接）のような状態は、狩猟採集時代には存在しなかったからです。

さらに、農業の生産高が高まると、農業によって生活する必要がない人々が生まれ、商業や手工業が誕生します。それらに従事する人々は、やがて都市に住むようになります。都市の人口密度は高く、疾病が生じやすいのは当然のことです。さらに家畜に由来する伝染病に都市民が感染し始めると、瞬く間にそれは都市中に広がります。都市は閉鎖された

空間であることから、人々は簡単に疫病に感染するようになります。

人類は、世界中に移住し、さまざまな地域の風土病と出会いました。それは長い年月をかけ、より疫病に感染しやすい世界を形成する過程でもあったと言えます。

新世界と旧世界

六大文明で栽培されていた主食用農作物は、メソポタミア文明が麦類、エジプト文明が小麦、インダス文明が麦類、黄河文明が小麦やアワ・キビ、長江文明がコメ、古代アメリカ文明がじゃがいもとトウモロコシでした。

世界の四大主要農作物といえば、麦、コメ、じゃがいも、トウモロコシです。そのうちの二つが、古代アメリカ文明で栽培されたものだったということは、注目に値します。

古代アメリカ文明で栽培されていたじゃがいもとトウモロコシは、大航海時代に持ち帰られるまでは旧世界では知られておらず、導入には時間がかかりましたが、導入後は旧世界の人々のカロリー摂取量は増加し、さらに人口の増大に寄与します。すると、旧世界で人口密度が高まり、疫病に罹患する可能性は増えました。

食糧生産が増加すると、都市に住む人々が増加します。するとますます、疫病が流行し

やすくなるのです。

コロンブスが新世界を発見した1492年以降、スペイン人を中心とするヨーロッパ人が新世界を侵略します。彼らは、当時新世界にはなかつた天然痘や結核てんねんとうを持ち込んだため、免疫力のないインディオは数千万単位で死亡したと伝えられています。

マヤとアステカ王国がスペイン人によって簡単に征服されたのも、ヨーロッパ人はある程度免疫があつたが、彼らには免疫がない天然痘や結核に罹患したためだと思われれます。

新世界からは、もともと西インド諸島の風土病であつた梅毒がヨーロッパに持ち込まれました。もちろん、大航海時代のことなので、この病気は世界中に広まることになります。たとえば、日本では、1512年に最初の患者が出たとされます。ちなみに、鉄砲の伝来は1543年のことであつたと言われていますので、鉄砲よりもはるかに早く梅毒は日本に入ってきたのです。

大航海時代になり、人々の移動が速くなると、疫病の伝播でんぱのスピードも非常に速くなります。その影響がここには表れています。

われわれの選択は正しかったのか

現代の世界は、飛行機による一体化のため、疫病があつという間に世界に広がります。コロナウイルスに世界中の人々が感染するのに、せいぜい2〜3カ月しかかかっていません。おそらく、現実にはもつと短い時間で、新型コロナウイルスは世界に蔓延しています。

グローバリゼーションが進み、国境を越えるのが容易になると、疫病は簡単に流行します。グローバリゼーションとは、通常は経済的にも文化的にも良いことのように思われますが、このようなマイナス面もあることは、誰もが理解しているはずですが。

そもそも出アフリカとは、人類が多様な地域に分かれて住むことによつて、種としての人類は滅びにくくなるという選択だったと、私は主張しました。もしこの考え方が正しいとするなら、われわれは、世界の一体化によつて人類が感染症にかかり、そのために人類全体が滅んでしまう道を選択してしまったということなのかもしれません。

確かに、そこまで強い感染力がある疫病はまずありません。ですがわれわれが、ホモ・サピエンスという種を生き延びさせるために最良の方策を取ってきたかどうかという点に関しては、疑問視すべきではないでしょうか。

グローバリゼーションとは、種の保存だけを考えるなら、実はかなりリスクな選択だ

ったと思われるのです。ですが、われわれは後戻りすることはできません。グローバルゼーションと並行しつつ感染症のリスクをできるだけ低下させる方法を考え出すべき時代に突入していると考えるべきでしょう。

これまでは、人々の移動が増大し、それとともに商品がたくさん移動する時代でした。しかし、オンラインの発展により、人々は移動しなくてもスムーズに情報が伝わり、さらに商品も輸送される時代へと変わっているのではないのでしょうか。

それは、出アフリカという人類の選択、すなわち人類が多くの地域に孤立して存在することで生存するという選択（ただし、それは私の仮説ですが）を、ふたたび人類が蘇らせたように思われるのです。

古代



世界経済はヒトの移動の産物だった

出アフリカから何万年もかけて、人類は世界中に住むようになりました。出アフリカこそ人類の運命を決定づけた出来事であり、その影響で、人類は、定住と移動を繰り返すことになりました。

もしかしたら人類の遺伝子に、移動遺伝子と定住遺伝子が組み込まれたのかもしれない。この遺伝子は、同一人物のなかでも、どちらかが強くなったり弱くなったりしていると考えられます。

この二つの遺伝子のうち移動遺伝子が強烈だったのが、フェニキア人であったように思われます。彼らは、現在のレバノンを根拠地とし、地中海西域を中心に植民活動をおこないます。フェニキア人は、紅海から西回りでアフリカ大陸を一周したと言われています。古代ローマ人が航海した土地にはすでにフェニキア人が訪れていることが多く、大航海時代の初期にヨーロッパ人が立ち寄った土地も、すでにフェニキア人が到達した地であることが多かったのです。しかし、フェニキア人の史料はほとんど残っておらず、そのためローマ人の業績が過大評価され、フェニキア人の業績が過小評価されているのではないかと思われてなりません。

中国に目を向けると、古代の経済成長のあり方が、あまり理解されていないように思わ

れてなりません。

秦しんの始皇帝しこうていによつて中国の経済成長に必要な制度が整えられます。文字や度量衡どりようこうが統一されたなら、経済活動に必要なさまざまなコストが大きく削減されます。広大な領土が単一市場になるといふ、現在のEUの政策の先駆けとなつたのが、始皇帝であつたと考えられるのです。モノが、大量に自由に移動できたのです。

また、暴君として名高い隋代ずいの煬帝ようたいですが、彼が建設した大運河こそ、中国の南北を結びつけ、中国の単一市場誕生に大きく貢献したことも間違いありません。始皇帝より大規模に、モノの大量移動を実現しました。

隋を継いだ唐の繁栄は、この大運河がなければありえません。唐は、隋が築いたインフラを利用して統治したのです。唐代の繁栄は、隋の経済システムを利用したからこそ可能になつたのです。

われわれは「移動」を選んだ人類の子孫である

一時は「1万数千人」まで減少した現生人類

私たち人類はどう進化したのか？

この命題を巡り、二つの説が対立していました。一つは、「世界各地で人類は別々に進化した」という説で、もう一つは「アフリカで進化した人類が世界各地に広まった」という説です。

さまざまな研究の末、現在では、後者が定説になっています。つまり現生人類はただ一人の例外もなく、アフリカ大陸に起源があるのです。われわれの祖先がアフリカ大陸から足を踏み出したこの出来事は、すでに述べたように「出アフリカ」と呼ばれます。

われわれホモ・サピエンスは今、コーカソイド、ネグロイド、モンゴロイド、オーストラロイドという四つの人種に分類されることもあります。実は人種間の遺伝的相違はごくわずかしかなかった。そのため、「人種」という概念すら否定する研究者さえいます。

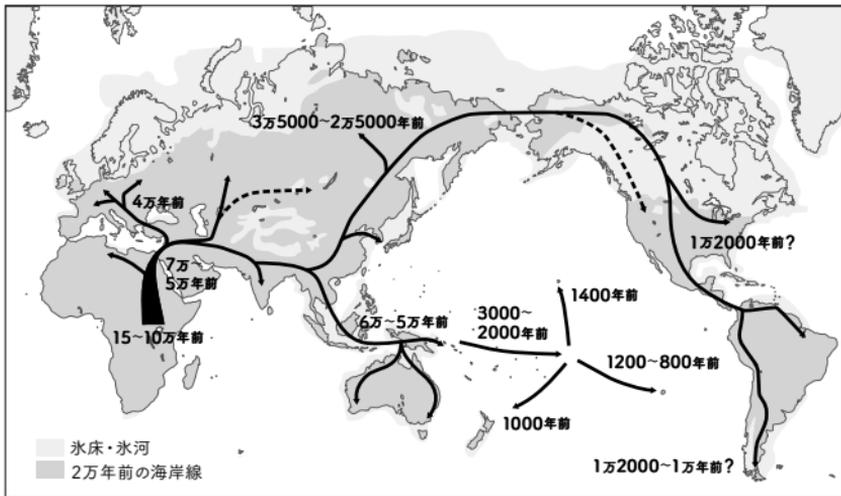
今から7万5000〜7万年前、スマトラ島にあったトバ火山が大噴火を起こし、大量

の火山灰が地球上にばら撒かれました。インドやパキスタンでは、この時の火山灰が2メートルもの厚さで堆積している地層が発見されています。

この時に大気中に飛散した大量の火山灰の影響で、地球の気温は3〜5度下がったと言われています。「トバ・カタストロフ理論」と呼ばれる説です。

そのため、ホモ・サピエンスは一時、1万数千人程度にまで激減したと言われています。人類に遺伝子の相違がほとんどないのはそのためなのです。ただし、まだこれは仮説にとどまると言うべきでしょう。

それよりもはるか昔、今から65000万年前に恐竜が絶滅したのは、隕石が地球に衝突し、急激に気温が下がったためだというのは現在の定説になっていますが、天変地異は、時として、生物の進化に大きな影響を及ぼすものです。トバ火山の噴火も、その一例です。



地図1 ホモ・サピエンスの出アフリカ

<http://bbs.jinruisi.net/blog/2011/05/987.html> をもとに作成

われわれの祖先は、都合2回、出アフリカを決行しました。第1回の出アフリカが15〜10万年前、第2回のそれは7〜5万年前、つまりトバ火山の大噴火の直後に生じています。われわれの祖先がなぜアフリカを飛び出したのかについては明確な理由はわかりませんが、深刻な食料不足に直面し、新たな食料供給地を求めて移動を始めたのだということも考えられます。特に2度目の出アフリカは、火山の大噴火による気候変動がその引き金になったのかもしれませんが。

出アフリカを可能にした毛皮と言語

本来、生物はその種ごとに生息できる場所が限られています。寒冷地に生息しようとするれば、厚い皮膚と体毛・羽毛が必要ですが、そうすると、逆に暑い土地には住めません。体毛が薄い人類は、そのままの姿では寒い土地に住むことができません。しかしわれわれの祖先は、動物の皮からなる（毛皮の）着物を身にまといました。これは、人類が2足歩行をし、手を自由に使って動物を捕獲し、皮を剥ぐことができたからこそ可能になりました。この技術があったからこそ、人類は寒冷の地や大海原に進出することができたのです。

出アフリカを可能にしたものがもう一つありました。それは言語です。

出アフリカは2回あったと述べましたが、実は1回目の出アフリカを決行した人類は、アラビア半島の付け根に位置するレヴァントまで移動したとされ、その後、絶滅してしまっています。

世界中に広がり、その後、コーカソイドやモンゴロイド、オーストラロイドとなるのは、2回目の出アフリカに挑んだホモ・サピエンスの子孫なのです。

では、最初に出アフリカをした人々はなぜ滅び、2度目の出アフリカの人々は世界中に散らばることができたのか。そこには「言語の獲得」という差異があったのではないかと私は考えています。

1回目の出アフリカの段階では、まだ言語を獲得してはいなかった。そのため仲間同士のコミュニケーションが十分でなく、アフリカを離れた遠い土地にまでは行くことができなかったのではないのでしょうか。

しかし、2回目の出アフリカの段階では、発話の能力を備え十分なコミュニケーションが取れるようになっていたと思われる。

これが両者の運命を分けたと考えるのが妥当でしょう。

ですが、人類がいつの時点で言語を獲得したのかは実はわかっていません。

そのための前提条件として、喉のどの形状が進展し、発話ができるようになること、そして脳のある部分で、会話を営める機能が誕生することが必要です。私は、それらは二つの出アフリカの間に人類に備わったと推測しています。

言語の獲得は、出アフリカの成功に不可欠なものでした。人々は集団で移動しました。その人数は、数百人であったと考えられます。

一緒に移動した人々が、発話によってコミュニケーション能力を飛躍的に高めたことは間違いないでしょう。移動するということは、それまでとは全く異なる環境に身を置くということです。一つの個体ではとても弱い人類は、共同しなければ外敵に対抗することはできなかつたはずでず。

つまり、高度なコミュニケーション能力の獲得が出アフリカ成功の要因の一つであり、また出アフリカによって人類はコミュニケーション能力にますます磨きをかけることになったのです。

文明よりも移動を選んだ人々

出アフリカにより、世界中に拡散した人類は、移動した先で定住し、「文明」、あるいは文明よりも他地域への影響力が小さな「文化」を生み出していきます。

一方で、定住ではなく、移動を続ける集団もありました。

出アフリカの過程は、南米大陸の南端に人類が到達した時に終わった、とされるのが一般的です。それは1万20000〜1万年前のことと言われています。

けれども、その後の時代になっても移動を続ける人たちがいました。

たとえば、東南アジア諸島部にいた人々です。土器文化をもったこの人々は、ニューギニア沖へ移動し、さらにハワイやニュージーランド、ついにはイースター島にまで移り住みます。

太平洋を渡ったこの人々は、ラピタ集団と呼ばれています。イモやバナナを栽培し、ブタやニワトリを飼い、丸太をくりぬき、帆を付け、船体の横に浮子を装着したアウトリガーカヌーで海上を移動しました。

その彼らが広大な太平洋上の絶海の孤島・イースター島に到達したのは、西暦800〜1200年のこととされています。

この出来事を、人類の出アフリカの一環と捉えることも可能だと私は考えます。

800年から1200年といえば、中国では唐や宋の王朝が栄え、ヨーロッパでは聖地奪還のために十字軍がイエルサレムへ遠征し、日本では貴族文化の栄えた平安時代から武士が実権を握る鎌倉時代に移行しようという時代です。

つまり世界各地で高度な文明が発達し隆盛をきわめていた時代になっても、定住ではなく移動を望む人々がいたわけです。人々を移動に駆り立てたものは何だったのか。私はそこに、人類に本能的に備わった「移動欲求」が関係していると考えます。

つまり、ラピタ集団のような人々は、一か所に定住して文明を高度化させるより、「移動したい」という本能を優先させた、と捉えることも可能なのです。

移動する人々は、文明と文明をつなぐ役割も果たしました。

どのような地域でも、他の地域から完全に孤立して存在することはまず考えられません。メソポタミア文明とインダス文明には通商関係があったことが知られていますが、この二つの文明を結合したのが商人でした。

遠く離れた地域に定住する人々の間では、必要なモノを交換し合いました。それが商人のルーツになります。人類とは、定住する人々と移動する人々からなるのです。

古代のビジネスパーソンは、ホモ・サピエンスの遺伝子に組み込まれた「発話」による豊かなコミュニケーション能力を備え、「移動したい」という本能に突き動かされた人々でした。そしてその遺伝子と本能は、出アフリカを経験した人々の子孫であるわれわれも間違いなく受け継いでいるはずなのです。

現代社会は「出アフリカ」に規定されている

出アフリカによって、「移住」と「定住」という二つの生き方が生み出されました。

現代社会を生きるわれわれは、基本的には定住者ですが、飛行機や高速鉄道のおかげで、祖先が数万年かかった距離をほんのわずかな時間で移動することができるようになりました。移動欲求は簡単に満たされるようになったのです。

私たちは今、世界中のどこに行っても、英語が話せればおおよそのコミュニケーションは取れる環境に住んでいます。これを可能にしたのも、私たちに組み込まれた、発話のための身体的・脳器質的な遺伝子のお陰です。

移動欲求も発話の能力も、2度目の出アフリカを決行した人々には備わっていたと、私は考えています。

移動したいという欲求の根源には、もしかしたら2度目の出アフリカを成し遂げた人々の遺伝子に関係しているのかもしれない。

地中海を股にかけて巨大交易圏を作り上げた

ヨーロッパ商業の父・フェニキア人

歴史研究に、史料は不可欠です。ですが史料というものは、本質的に勝者による記録です。敗者の記録は、廃棄されてしまうことも多く、そうなると人の目に触れることはありません。

したがって、実は史料にあまり信用が置けない場合もあるのです。

ここで取り上げるフェニキア人は、おそらく一般に知られている以上に歴史上重要な役割を果たした民族です。しかし彼らは、古代ローマとの戦いに負けてしまい、その史料はほとんど燃やされてしまいました。

そのため、勝者であるローマの偉大さばかりが強調され過ぎ、フェニキア人の重要性が軽んじられてきました。

そこでここでは、フェニキア人が歴史上どれほど重要であったのかを見ていきたいと思います。

フェニキア人とはどういう民族だったのか

一般に、「フェニキア人」は、エーゲ文明に属するクレタ文明（前2000～前1400年頃）とミケーネ文明（前1600～前1200年頃）が後退した後に、地中海交易で栄えた民とされます。

フェニキア人についてはあまり多くのことはわかっていませんが、セム系の語族に属し、海上交易に従事していた民であったことは確かです。

フェニキア人は、ユーフラテス川上流に定住し内陸交易を担ったアラム人とよく対比されます。アラム人がラクダによってシリア砂漠などで隊商を組んで交易をしたのに対し、フェニキア人は海上交易で活躍しました。

さらに、アラム人はアラム文字を作り、それがヘブライ文字、アラビア文字、シリア文字、ソグド文字、ウイグル文字の母体となりました。それに対してフェニキア人は、まだ象形性が残っていた古代アルファベットを改良し、線状文字にし、今日まで続くアルファベットのもとを作ったとされます。

ちなみに、フランスの古代エジプト学の研究者・シャンポリオン（1790～1832年）が、後代にロゼッタ石からエジプトの神聖文字（ヒエログリフ）を解読しましたが、それはエジプトの文字がアルファベットの祖先だからこそ可能になったのです。

このように、アラム人やフェニキア人が文字を発明・改良したのは、おそらく交易のためであったと考えられます。交易というのは、単に言葉を交わすだけで完結するわけではありません。使用言語の違うさまざまな民族と意思を通じ合わせなければなりません。そのため、文字が必要だったのでしょう。

フェニキア人が使用していたアルファベットは、現在ののように26文字ではなく、22文字で右から左へ書いたようです。

彼らが改良したアルファベットは、ヨーロッパ各地で使用されるようになりました。それは、彼らが交易のためにさまざまな地域に移動する人々であったからでした。言うなれば、フェニキア人は「ヨーロッパ商業の父」なのです。

フェニキア人の根拠地は、地中海東岸、現在のレバノンにありました。彼らはそこで生長していたレバノン杉を使って、地中海の交易活動に進出したのです。

レバノン杉は、高さが40メートルほどにまで生育するのですが、現在ではほんのわずかしか残っていません。それは、フェニキア人をはじめとする交易に従事する人たちが船材や建材にするため伐採したからです。

耐久性があり香りがよいため、高級木材として珍重されたレバノン杉は、神殿の内装材

にも使われたようです。ちなみに、現在のレバノンの国旗の中央に描かれている樹木のシルエットもこのレバノン杉。それだけこの地の人々にとって誇るべき存在なのです。

さらにフェニキア人の特産品として、赤紫色の染料がありました。この染料で染めた織物も有力な商品だったのです。他にも、高度な技術を身につけた職人が作り出す象牙細工や貴金属工芸品、ガラス細工もありました。地中海世界各地の貴族階級に属する人々にとって、フェニキア人がもたらす品物は垂涎すいぜんの的だったのです。

この強力な「商材」を武器に、フェニキア人は貿易と海運で地中海を席卷せっけんしました。地図2に、フェニキア人の地中海における交易路を示しました。彼らの交易ネットワークは全地中海に及んでいます。古代ローマのそれと比較しても、各段に広いものです。フェニキア人ほど広大な取引網をもつ民族は、この当時のヨーロッパには見当たりませんでした。われわれは、「古代地中海世界はギリシア人とローマ人によって形成された」と思い込みがちです。

しかし、古代地中海世界は、彼らに加えてフェニキア人によって築かれたと考えるほうが妥当です。彼らは地中海の物流を完全に支配していたのです。

フェニキア人は、前12世紀から地中海の物流をほぼ独占するようになり、いくつもの植

民市を建設するようになります。その植民市を中継点として、地中海の物流は徐々に統一されていきます。このフェニキア人が開拓した航路は、ずっと後になつてローマ人やムスリム（イスラーム教徒）商人、イタリア商人、オランダ商人たちも利用することになります。が、当初はフェニキア人だけが知る「秘密のルート」でした。

フェニキア人は、古代ヨーロッパ世界で最高の航海術を誇っていました。

古代ギリシアの歴史家ヘロドトスによれば、エジプト王のネコ2世（在位…前606〜前583年）の命を受けたフェニキア人が、紅海から西回り、2年半かけてアフリカを周回したとされています。

また前450年頃、カルタゴのハンノという航海者は、アフリカ西岸まで航海したという記録が残されて



地図2 フェニキア人の地中海における交易路

http://wps.pearsoncustom.com/wps/media/objects/2427/2486120/chap_assets/maps/atl_map5_2.html をもとに作成

います。

つまり他のヨーロッパ人が大航海時代が始まった15世紀に成し遂げたことを、フェニキア人はすでに前6世紀に遂行していたのです。

ティルスの役割

フェニキア人が築いた植民市は次第に都市国家へと成長していきます。中でも有名なのが、シドンとティルスです。ここでは、そのうちティルスについてお話ししましょう。

ティルスは、やはり現在のレバノンの地中海沿いに位置する都市でした。ティルスでは、銀・金・錫^{すず}・鉛・奴隸・青銅商品・馬・軍馬・ラバ・象牙・小麦・きび・蜜・油・ぶどう酒・羊毛・布地・羊・山羊・香料・宝石・黄金などの商品が取引されていました。これらの商品は、ティルスに輸入され、そして再輸出されました。ティルスは、東地中海最大の交易拠点でした。

この時期、ティルスのフェニキア人はアケメネス朝ペルシアと結び、その保護を受けながら勢力を伸ばしました。多くの商品が、ティルスを経由して、フェニキア人の船で行き来したのです。

ティルスは地中海沿岸にいくつもの植民市を築いていきます。そのなかでもっとも重要なのが、現在のチュニジア共和国にあったカルタゴです。カルタゴは前820年頃ないし前814年頃に建国されたと言われますが、前6世紀には西地中海における交易の中心地へと成長しました。

カルタゴの隆盛

地中海に面したカルタゴは、他のフェニキア人の植民市と同様、水深が比較的浅く、簡単に錨いかりを下ろすことができるので、船を港で停泊させるのが容易でした。

地中海のほぼ中央に位置するカルタゴは、シチリア島にも近く、北アフリカからイタリアに至る地中海の南北路を押さえることができるという利点がありました。カルタゴは地中海の交易ネットワークのちょうど中心に位置していたので、母市・ティルスがアレクサンドロス大王の侵攻によって衰退してからは、地中海交易の中心地となり、大いに隆盛をきわめました。

当時カルタゴは、シチリア島の西半分を支配していました。そのことにより、イタリア半島を統一して西地中海の新興勢力として台頭してきたローマと、西地中海の覇権をめぐ

って直接対決することになってしまいました。これがポエニ戦争（前264〜前146年）です。これは、帝国主義的に領土を拡大していた2国間の避けられない争いでした。

第1次ポエニ戦争でカルタゴを破ったローマは、初めてイタリア半島外の領土となるシチリアを獲得します（前241年）。

一方、シチリアを失ったカルタゴは、多額の賠償ばいしょう金の支払い義務まで負わされます。苦難はそれだけではありませんでした。カルタゴが支配していたサルデーニヤ島の守備を担っていた傭兵部隊ようへいが反乱を起こしたのを機に、ローマによってサルデーニヤ島、さらにはコルシカ島までまんまと奪われてしまったのです。カルタゴは海上交易の拠点を失ってしまいました。国家の死活問題でした。

カルタゴはローマに対する憎悪の念を強くもつようになりました。そうしたなか、一つの大きな動きがありました。第1次ポエニ戦争に参加した将軍・ハミルカル・バルカスが、遠征軍を率いてイベリア半島へ進出します。イベリア半島の鉱物資源はカルタゴにとって重要な交易品でした。そこまでローマに奪われたくないという思いもあったのかもしれない。

その後、フェニキア人はイベリア半島で急激に勢力を伸ばしていきます。カルタヘナ（カ

ルタゴ・ノヴァ)、アルメリア、バルセロナといった都市は、カルタゴのフェニキア人が築いたものなのです。

カルタゴとローマの争いは続きました。前218年には、第2次ポエニ戦争が始まります。

カルタゴ軍を率いたのは、イベリア半島に進出したハミルカル・バルカの息子・ハンニバルでした。彼は幼い頃、父に連れられて行った神殿で「打倒ローマ」を誓ったという逸話が残っていますが、その誓いを実行に移したわけです。

現代においても戦術家として非常に名高いハンニバルは、ローマに奇襲を加えます。カルタゴ・ノヴァを出発したハンニバルの軍勢は、ピレネー山脈を越え、ローヌ川を渡り、そしてアルプス山脈を越えてローマに向かったのです。よく知られた「ハンニバルのアルプス越え」です。アルプス越えでは雪崩なだれに襲われるなど、決死の行軍となりました。その際、37頭もの象を引き連れていったそうですから、前代未聞、空前絶後の大作戦でした。およそ5万人の軍勢だったカルタゴ軍は、5カ月かけてイタリア半島にたどり着いた時にはほぼ半減していたといえますから、その過酷さが偲ばれます。

この第2次ポエニ戦争の最大の決戦は前216年のことでした。これまた歴史に名高い

カンネーの戦い（カンナエの戦い）です。ガリア人らの援軍を合わせて5万人のカルタゴ軍は、8万人ほどのローマ軍と対峙します。

多勢に無勢でしたが、将軍・ハンニバルによって鼓舞された兵士は勇敢でした。ハンニバルによって敷かれた陣形もローマ軍を大いに翻弄しました。

終わってみれば8万人のローマ軍は7万人もの死者を出したと言われています。対するカルタゴ軍の死者は5700人。カルタゴ軍の圧勝でした。

しかしカルタゴは、その勝利をうまく生かすことができませんでした。その後、ローマの将軍スキピオによって形成は逆転。和平を模索し始めた本国・カルタゴはハンニバルに帰還命令を出します。憤慨しつつもカルタゴに帰還したハンニバルでしたが、そこにスキピオ率いるローマ軍が攻め入ってきます。ハンニバル軍とスキピオ軍は、カルタゴの近郊ザマで対決、カルタゴはふたたび敗北してしまおうのでした（前201年）。

この敗戦でカルタゴはまたも大きなダメージを受けました。多数の戦死者や捕虜を出しただけではなく、またもや多額の賠償金を課せられ、軍備の大幅な削減も飲まされたのでした。

ところがカルタゴは逞しかったです。

第2次ポエニ戦争後、任期1年の最高政務官になったハンニバルは、貴族の権力を大幅に削って民主化を進め、財政改革にも手を付けます。これらの改革が奏功し、カルタゴは徐々に繁栄を取り戻していくのです。

もともとハンニバル自身は、1年後に最高政務官の任期が終わると、反対派に追い詰められ、ついにはセレウコス朝シリアに亡命することを余儀なくされています。

一方で、カルタゴの再興を目的の当たりにしたローマは、猛烈に警戒心を強めます。さらに当時のローマの支配層にとっては、どれだけ軍事的成果を上げたかがきわめて重要な問題になっていました。軍事的な成果が、国内での地位の向上に結びついていなかったからです。

そうした情勢のなか、カルタゴはローマにとって格好の標的になってしまいました。

カルタゴの殲滅を狙ったローマは、ついに前149年には第3次ポエニ戦争を仕掛け、カルタゴを滅ぼしにかかります。ローマ軍は、文字通りカルタゴ市を破壊し尽くしました。カルタゴのフェニキア人は殺されるか奴隷になるしか道はありませんでした。ローマ軍はカルタゴが再興することがないよう、その地に大量の塩を撒いたと言われています。ローマ軍の仕打ちはそれほど苛烈なものでした。

カルタゴが滅ぶと、交易拠点を失ったほかのフェニキア人の都市国家も急速に衰えてい

きます。それに代わってローマは、西地中海を支配する大帝國へと成長していくのです。一連の戦争で、カルタゴに関する文献史料はあらかた失われました。したがって研究はきわめて困難であります。今後、考古学遺跡の発掘で、もっと多くのことがわかるのではないかと期待されています。

フェニキア人の遺産

人類は、定住することで文明を築きました。その文明は、移動する人々によって各地に伝播しました。その役割を請け負った民族の一つがフェニキア人でした。

フェニキア人は、ビジネスによってさまざまな地域を結びつけ、その文明と文明をつなぎ合わせました。彼らが築いた交易ネットワークは、北海、地中海、紅海、さらにはアフリカ西岸に至る巨大なものです。この広範な地域に、各地の文明を伝え広げていったのですから、その影響力は絶大です。

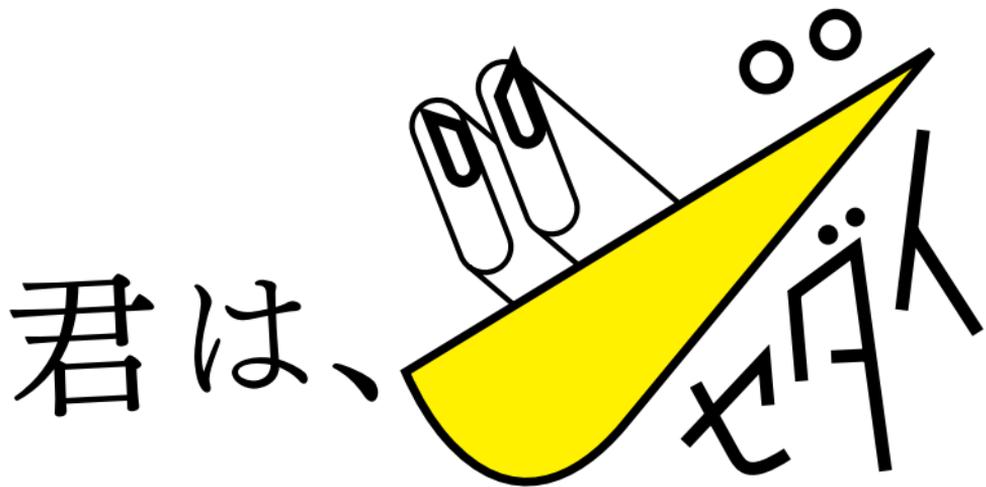
これらの地域は、後代にヨーロッパ人とムスリムによって統治されます。ということは、双方の文明の形成にはフェニキア人の文化も貢献したはずで

ローマ人は、カルタゴの街を焼き尽くしました。主要な史料も灰と化しました。そのた

め、勝者であるローマ中心の歴史のみが後世に伝えられることになってしまったのです。現代の私たちが学んでいる世界史も、その例外ではありません。

しかし、もしもフェニキア人という「交易民族」の活躍がなければ、地中海世界の結合はもつと違うものになっていたはずですし、イスラーム世界の文化もまた現在とは違ったものになっていたと思われれます。

歴史の彼方に消え去ってしまったフェニキア人ですが、われわれは彼らの果たした役割をもつと知り、深く学ぶべきなのです。



何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ **ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!